

2019（令和1）年度 京都大学 入試問題 理系 第2問 解答例

問一

良い批評家は、芸術家や作品の評価に際し、自分の考えが絶対に正しいとは思わず、自分の好みや主観的傾向を意識して、他人を説得し、納得させる心構えと能力があるから。

* 「いうなれば、～」（比喩）「説明したり、～訂正したり」（例）を書かないこと。

問二

すぐれた音楽批評・音楽評論とは、音楽的対象の核心を端的な言葉で的確に特性指摘することであるから、凡庸で曖昧な言葉の使用は、批評目標の断念に等しいということ。

* 「無性格な中性的な（言葉で呼ぶのは）」は比喩であるから、そのまま用いず、類似性を意識した置換を行うこと。

問三

批評は対象となる芸術作品の核心を端的に指摘するが、作品は核心だけで成立するわけではないので、批評は作品の解説ではなく、それ自身一つの作品であると思われるから。

* 「筆者が（Sが）考える（Pする）」理由であるから、筆者の「主観的心理的理由（動機や意図）」の説明が必要である。「～と思われるから。」などの結び方をしよう。

* 「批評の方が対象より分かりやすい、というのは真実ではない」という理由であるから、「批評も対象と同じく『作品』であるから（難易には本質的な差がない）」というのが、解答の第一のポイントである。一方で、「作品の批評は作品解説ではない」という本文内容は、「批評によって作品が分かりやすくなるというのは誤解だ」ということのものであるから、有機的に読めていないと「批評の方が対象より分かりやすい、というのは真実ではない」という理由になるとは見えないであろう。しかし、本文中のこの意味段落のコンテキストでは、明らかに両者は関係しており、解答要素としても必要である。一般的な意味での「解説」とは、その対象（作品）の理解が難しいからこそその「解説」であるから、「解説の方が作品より分かりやすい」と思うのは、ごく常識的な「誤解」の仕方なのである。そこで、もし「批評は作品の解説などではない」となれば、「それなら批評が対象より分かりやすいとは言えない」という傍証となるわけである。「批評は解説ではない」という指摘は必須であろう。京大の出題者も「批評についての筆者の考えと広く流布している考えの違いを理解し」ているかを問うと出題意図を明記している。